

富山市立図書館

# 図書館だより

第46号

2011.6

## ともに創る図書館サービス 2

### 読み聞かせボランティア

#### 読み聞かせボランティアとは

図書館で活動するボランティアの一つに、「読み聞かせボランティア」があります。

「読み聞かせ」とは、子どもに絵を見せながら絵本を読んで聞かせることです。読み聞かせをすることにより、子どもたちに絵本の楽しさを伝え、読書への関心を高めることができます。

現在、図書館や学校などで、ボランティアの方による読み聞かせの活動が目覚ましい広がりを見せています。

#### 読み聞かせボランティアの活動

家庭では、一人ひとりの子どもに向きあって本を読みますが、ボランティア活動で読み聞かせをする場合は、おはなし会などで複数の子どもを相手にしています。

「読み聞かせ」を子どもたちの前でを行うには、様々な技術が必要になります。たとえば、聞き手の子どもの反応を見ながら適切な間をはかることや、ページをめくる速さを調整することなどです。これらの技術は、図書館で行う「おはなしの会」や「子ども会」で実演を繰り返して経験を積み、身につけていきます。また、本を選ぶ力も経験を重ねることで養っていきます。

ボランティアグループは定例勉強会を開いており、読み聞かせをはじめ、おはなしを覚えて語る

ストーリーテリングや手遊びなどの研修を行い、常に資質の向上に努めています。

こうした日々の研鑽を発揮する場は図書館内だけではなくありません。市内の保育所・幼稚園で行う「おはなしワールド」や、小学校の1・2年生のクラスでブックトークなどを行う「学校訪問」に図書館職員と共に参加し、本やおはなしの楽しさを届けています。

おはなし会の後には、子どもたちから「おもしろかった」「もっと読んでほしい」など、多くの反応があります。その子どもたちの姿がボランティアの喜びとなり、活動の励みになっています。



子ども会での紙芝居



研修の成果が発揮される「おはなしワールド」での読み聞かせ

## 読み聞かせボランティアのこれから

「富山市子ども読書活動推進計画(第二次)」では、子どもの読書に関わるボランティア団体との連携・協働することが重要であると位置づけています。

図書館の職員数には限りがあるにもかかわらず、幼稚園・保育所、小学校から読み聞かせをしてほしいという要請が、数多く寄せられます。なるべく多くの施設で読み聞かせを行い、子どもたちに本の楽しさを知ってもらうには、ボランティアの協力が欠かせません。

図書館で活動するボランティアグループには、「富山市立図書館よみきかせの会」をはじめ、「大山おはなしの会」(大山)、「みすず会」(大沢野)、「八尾おはなしの会」(八尾)、「トマトの会」(婦中)などがあります。今後は、グループ間の情報交換や連携した活動が必要であると考えられます。

図書館は、これからもボランティアの育成と支援を行い、子どもの読書活動推進に取り組んでいきます。  
(本館 高田)



「富山市立図書館よみきかせの会」定例勉強会の様子

# 岩倉政治文庫の資料 其の十四

## 長編小説『大伴家持』 昭和23年(1948年)

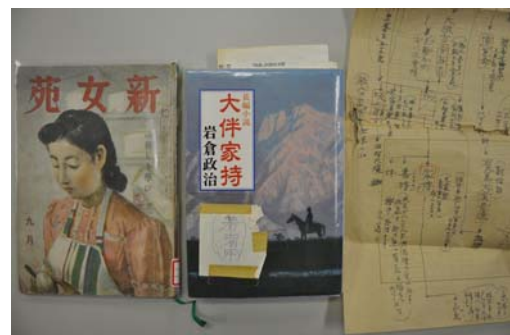
『大伴家持』は、波乱に富んだ家持の人生の中から、青春時代と越中守時代を中心に描いています。藤原氏が勢いを増してゆく時代、家持は斜陽の名門大伴家の当主として生涯悩み続けますが、この小説では越中でのいきいきとした様子が印象的です。珍しい光景に見入ったり、田植えを体験したりする姿はほほえましく、富山県民にとって馴染みの深い家持という人物に、ますます親しみがわいてきます。そしてまた、家持の目と歌を通して見る越中は、驚きと新鮮さに満ちています。美しい自然が誇らしく思われるとともに、遥かにしえの越中に思いを馳せずにはられません。

『大伴家持』は、戦後まもなくの1948年に六興出版部から出版されています。それを改稿した新版が、1986年に新興出版社から発行されました。

残念ながら当文庫では1948年のものは所蔵していませんが、雑誌「新女苑」1943年9月号には、

「高志の家持」という短編小説が掲載されています。「能登路には、早くも秋風がたちそめてゐた。」の一文から始まるこの短編は、長編では第十八章から第二十章にあたる部分のもとになっています。

(本館 海野)



(左)「高志の家持」掲載の「新女苑」  
1943年9月号

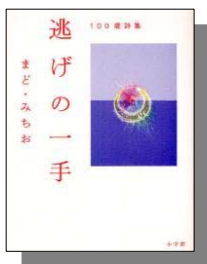
(中)岩倉政治氏が所有していた『大伴家持』  
(表紙に「著者用」という貼紙あり)

(右)岩倉氏直筆の大伴氏家系図

# 心をとらえる言葉 — 詩の力 —

『遊ぼう』っていうと『遊ぼう』っていう。『馬鹿』っていうと『馬鹿』っていう。」

印象的な繰り返しから始まる、金子みすゞの「こだまでしょうか」という詩が、話題になっています。また、昨年は 99 歳の詩人・柴田トヨの詩集『くじけないで』が、ベストセラーになりました。今なぜ、詩が人の心を引きつけているのでしょうか。



『逃げの一手』  
まど・みちお／著  
小学館 2009

まど・みちおは、柴田トヨと同じく高齢ながらも、今なお詩作を続けている現役の詩人です。童謡「ぞうさん」の作者として、ご存知の方も多いことでしょう。これは 2009 年に 100 歳を迎えた著者の、最新詩集です。テレビに映った赤ん坊の姿に、神の見えざる手による祝福を見た「あかちゃん」のような作品もあれば、繰り返される死刑判決を嘆く「よくこの頃」のように、社会に対して疑問を投げかける作品も収録されています。

まどの作品は、どれもわかりやすく、微笑ましいイメージを抱かれがちです。しかし、その詩句は、豊富な人生経験を積んだ詩人によって、選び抜かれた言葉ばかりです。平易な言葉の背後に、深い含蓄を感じさせるところが、読者の共感を呼んでいると言えます。

人生の先達者の作品とは反対に、子どもたちの作った詩を集めた詩集に『一年一組せんせいあのね』（鹿島和男／編 理論社 1981）があります。この本は、神戸市の小学 1 年生が作った詩が収録されていますが、時に子どもとは思えないほど複雑な感情を秘めていることがあり、はっとさせられます。

とりわけ、火事によって帰る家をなくした女子児童が、激変してしまった生活を描き出した「かじ」

に始まる数編は、東日本大震災で被災された人々を連想させます。「ほんまにわたしらどうなるんや／これからどないしたらええのんやろ」という、率直な言葉は、心の叫びを直接的に表現したもので、詩的技巧の有無を超えた、言葉の持つ力を感じさせます。

田村隆一（1923～1998）は、鮎川信夫や谷川俊太郎などと共に、戦後の現代詩を代表する詩人です。現代詩では、暗喩や哲学的表現が多用されるため、やや難解な印象があります。田村の作品も例外ではありませんが、じっくりと味わってみると、豊かな情感や冷静な社会観察を秘めていることに気付かされます。



『田村隆一  
20世紀詩人の肖像』  
河出書房新社 2010

初期作品の中で「言葉のない世界を発見するのだ／言葉をつかって」と歌った田村は、その後も多くの詩を作り続けました。「言葉にならない」あるいは「言葉にできない」感情を、あえて言葉で表現しようと、果敢に挑み続けることによって、田村は詩壇に大きな功績を残しました。言葉の持つ力を、最も強く信じていた詩人と言ってよいでしょう。昨年から今年にかけて、田村の全集が刊行され、その多彩な活動がまとめられています。

古来より優れた詩の言葉は、人々の心をとらえ、愛されてきました。未曾有の自然災害に見舞われた後の日本では、多くの人々が、不安・悲しみ・怒りなどの入り混じった、言葉にしがたい感情を抱えています。そうした状況だからこそ、詩のように短いながらも、多くの人々の共感を呼び、奮い立たせる「言葉」の持つ力が、注目されているのではないのでしょうか。 （本館 舟山）



# レファレンスあれこれ

## Q. 富山で起きた過去の地震や、活断層の分布等についてわかる資料を紹介してほしい。

今年3月11日の東北地方太平洋沖地震の発生から、地震や津波、放射能に関する参考質問が多く寄せられている。今回はその中でも最も多い、地震に関するレファレンスを紹介する。

富山県の古い地震の記録は『富山県気象災異誌』（日本気象協会富山支部 1971）に掲載されている。この資料は過去の文献を元にまとめられ、地震だけではなく、異常気象や火災、疫病、地すべり等、さまざまな災害について、県内の被害状況がわかるようになっている。地震の項目には地震の日時や規模、震源地等が記載されているが、あまり詳細なものではなく、1971年以降の記録を調べることはできない。

近年の地震情報については、『日本の自然災害500～1995年』（日本専門図書出版 1998）と『日本の自然災害1995～2009年』（同、2009）を見ると、全国の大地震の過去の記録や、地震に伴って発生した津波の被害記録、その他いろいろな自然災害について詳しい解説がある。ただし、他の地域を震源地とする地震についての、富山県における被害状況が詳細に記録されているものではない。

インターネットで富山地方気象台のHP（※1）を見ると、最新の地震情報や、富山県における過去の地震の記録を見ることができる。また、このHPでは県内各地域で観測された震度も公開している。例えば、東北地方太平洋沖地震の際に、富山県では震度3が観測されたことがわかる。そのほか、月ごとに掲載される「富山県の気象・地震概況」には「富山県とその周辺の地震活動」の項目もある。

次に活断層について調べてみる。市内の中央部にある呉羽山断層帯を『1:25,000 都市圏活断層（富山）』（日本地図センター 2002）で見ると、断層帯が呉羽山丘陵から神通川を横切り、富山湾岸に延びていることがわかる。この地図ほど詳細ではないが、『日本列島・地震アトラス 活断層』（集英社 1995）では、全国の活断層マップを見ることができる。他にも『いま活断層が危ない』（中日新聞社 2006）には呉羽山断層帯と砺波平野断層帯の特徴や地震発生確率、地震発生間隔等について書かれている。

また、地震に伴って発生する津波についての専門資料が『津波の事典』（朝倉書店 2007）である。過去の津波の記録や、津波発生メカニズム、予測方法、対策方法等が詳細にまとめられている。

最後に、これらの情報に併せて、地震にどう備えるかということについても考えてみたい。富山県では「富山県地域防災計画」を元に、『富山県防災マップ』を配布している。有事の際の対応や最寄りの避難所の確認、防災グッズの準備等に役立つ資料である。

また、今年4月20日号の「広報とやま」と合わせて全世帯に配布された『富山県地震防災マップ』には、地震によるゆれやすさマップや、地域の建物危険度マップが掲載されている。マップは、各世帯が居住する地域版のものが配布されているが、その全体は、富山県のHPでも見ることができる。富山県立図書館本館・参考室にも所蔵している。

万が一、地震が発生した際には、県内の警報・注意報が常時更新されている「富山防災 WEB」（※2）が役立つ。緊急時にはテレビやラジオの放送を待つだけではなく、自ら最新の情報を入手する積極性を持ちたいものである。

（本館 新保）

※1 富山地方気象台HP <http://www.jma-net.go.jp/toyama/>

※2 富山防災 WEB <http://www.bousai.pref.toyama.jp/web/jsp/index.jsp>